巻頭言

雑感—基礎研究の立場から

伊　藤　貴　康†

科学技術の分野における基礎研究の重要性とその研究体制の強化が繰り返し唱えられてきているが，著しい進展も見受けられないし，これという施策も取られていないという実感を多くの研究者が抱いていると思います．情報工学・情報科学・ソフトウェア科学など本学会の関連する学問分野の状況を見たとき，基礎研究に携わる研究人口・研究活動の層の薄さには，惨たんたるものがあります．

10 年前・20 年前に比べると，本学会の会員は大幅に増加し，電子情報通信学会情報システムグループ，人工知能学会，ソフトウェア科学会などを含めると，我が国の情報関連の研究者・技術者の人口は大幅に増加しています．しかし，情報関係の先端分野において，独創性・独自性のある基礎研究・理論研究に取り組む研究者がきわめて少なく，この分野における国際会議や国際的なワークショップを企画・立案すると，このことが強く実感されます．

学会は，会員によって構成されるわけですから，会員へのサービス，会員への活動の場の提供など会員の大多数からの当面の要望・要求に応えるという立場がありましょう．現在の会員構成を考えると，情報処理の応用面をさらに強化し，本学会としての独自性を出すことも考えられます．しかし，情報工学・情報科学・計算機科学・ソフトウェア科学・人工知能など情報関連の学問分野の新しい基礎を築くような研究活動を奨励し，援助し，育成していくような土壌を作ることも，学会の寄って立つ学問の発展，人材の育成という観点から重要であると思います．

我が国における情報関係の基礎研究の現状は，その貧困の原因・理由がどこにあるかを一言で指摘し，その対策が明快に提案できるほど事態は簡単ではないと思います．教育の荒廃，大学の貧困，企業の拝金主義・人材不足からくる弊害，若い人たちの価値観・ライフスタイルの変化，独自性・独創性より完成度の高いものを好む国民性などさまざまな原因・理由を指摘することができましょう．

本学会誌「情報処理」には，欧米生まれの理論や基礎的なテーマについての解説記事がよく掲載され，特集号も組まれます．これに比べると論文誌に占める基礎研究・理論研究の論文の比率はかなり低くなっています．基礎研究への関心・知識欲と，基礎研究そのものに取り組もうとする研究的情熱や意欲の間に大きなギャップがあるように思います．

本学会の活動が，外国生まれの学術研究成果の応用に偏せず，基礎研究に根ざした魅力ある学問・技術分野を創成し，次の世代に「夢」を与えるようなものになってくれることを期待したい．

（平成 3 年 11 月 6 日）

† 本会理事　東北大学